

林檎停通信

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村

NO.155 2016.4.10

町田 登・幸子



私たちのところには人様から頂いた絵画がなんてんかある。その内の一枚は中学生の時の私たちの息子をイメージした絵だ。モデルはマキリだ。70号はあると思われる大作はその絵を背にすると人の気配がするような存在感がある。作者は埼玉の野坂光子さんという方で、私よりは少し年齢上のお姉さんだ。もう何年もお会いしていないが、愁いに満ちた白い横顔は健在でしょうか。

彼女との出会いは40数年前民工門殿と産直運動を始めたときの、最初の消費者グループの一人でありそれはそれは長いおつきあいである。私は老眼も進み、前歯も抜け、耳も遠くなり、あの頃はこんな自分を予想できませんでした。

また僕だった頃の話しをしましょう。学生時代北海道につれていってもらった。主体性の欠如だったためか何の予備知識もなく流されるままに団体行動の中にいた。アイヌコタンでは民族衣裳のアツシを着せられ記念写真におさまった。矛盾も感じない観光客の一人だった。苫小牧の材木置場では気の合う三人で知床旅情などを歌ってウイスキーに酔いしれた。それぞれの思いは旅の空であって確たる未来はなかった。一人は宮仕えともいえるまじめな技師になった。それからアメリカへ渡った彼はそのためかどうかわからないが、日本へ帰ってきてコケてしまった。そしてもう一人の僕は不良になった。

二度目の北海道は風雪にさらされて、アイヌの長い歴史に思いを馳せた。建設現場で働いて得た金で12,000円もする「アイヌ民族誌」を買って読んでいたから表面のことは理解していた。帰りの列車の中で読むための本は旭川の書店で求めた。橋根直彦著「我れアイヌ自然に起つ」という獄中記だった。僕は大きなショックを受けた。差別される側の血を吐くような現実に自分の無知さを恥じた。人類学者や言語学者の研究は差別を助長しているのではないかと。一日800円の日当、赤ちょうちんで焼酎コップ一杯60円の時代に買ったその本を抹殺しなければならないのかという思いにかられた。自分のずるさもあってか、いや視点を変えればいいのだ、記録としてであればいいのだとその思いをとどめた。それからあらゆるアイヌ関係の本を読んだ。つい最近、墓から掘り出したアイヌ遺骨を研究材料にしていた北大が、一部を遺族側に返還したという記事が朝日新聞にあった。なんともいえない悲しい遠い過去である。

旭川市博物館勤務の瀬川拓郎さんがこの2月に出版した「アイヌと縄文」の中に、アイヌは縄文の末裔だという説があると書いている。大陸から渡来した弥生文化を拒否して自然と共にある精神文化をかたくに守り続けたと。

我が家の片隅の野焼き窯で縄文土器のレプリカを製作していたなわふみとさんが言っていた言葉を思い出す。縄文人には殺し合いの痕跡がないのだと。野坂さんは今、その縄文の世界に情熱をかたむけているようだ。絵の写真を送ってくださったが、やはり存在感のある力強い作品だ。アルカイダのビンラディンだったかの顔にそっくりだったなわふみとさんが存命なら入れ歯をはずして喜んだにちがいない。いつかそれらの絵に出会える時間をつくりたいと思います。そしてヒトシをひっくり返しておしゃべりになるやさしい旦那さんと少々の酒を交わしたいと。

差別は権力によって作られてきた。明治の頃コウトクシュウスイ、その名はダイジロウはその権力によって殺された。ヘイトスピーチなどは無知の大衆のきわみだ。原発も安保法制も両者が一体となって推し進められていく現実には私たちはどう立ちむかっていったらいいのだろうか。

りんごすべて出荷できました。ありがとうございました。8月末頃から早生種の出荷が始まる予定です。それまではジュースでりんごの香りを楽しみ下さい。グラニースミス・ふじ・ミックスの3種類あります。詰め合わせも可能です。お求め下さい。そして林檎停へあそびに来て下さい。お待ちしております。